

国立東京療養所にて

救いの目的

――詩篇第79篇――

（『愛泉』誌第25号、1959年11月15日発行より転載）

1959年8月22日

小池辰雄

聖名の栄光のため 聖名を呼ぶ 聖名を崇める イエス・キリストの聖名

【詩篇第79篇】

アサフのうた

1 ああ神よ、もろもろの異邦人はなんじの嗣業の地をおかし、なんじの
聖宮をけがし、エルサレムをこぼちて礫堆となし、

2 なんじの僕のしかばねをそらの鳥に与えて餌となし、なんじの聖徒の肉を
地のけものにあたえ、

3 その血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり。されど之をほうむる
人なし。

4 われらは隣人にそしられ、四周のひとびとに侮られ、嘲らるるものとなれ
り。

5 エホバよ、斯て幾何時をへたもうや、汝とこしえに怒りたもうや。なんじ
のねたみは火のごとく燃ゆるか。

6 願くはなんじを識らざることくにびと聖名をよばざるもろもろの国のうえ
に烈怒をそそぎたまえ。

7 かれらはヤコブを呑みその住処をあらしたればなり。

8 われらにむかいて先祖のよこしまなるわざを記念したもうなかれ。願くは
なんじの憐憫をもて速かにわれらを迎えたまえ。われらは貶されて甚だし
く卑くなりたればなり。

9 われらのすくい神よ、名の栄光のために我儕をたすけ、名のためにわれ
らを救い、われらの罪をのぞきたまえ。

10 いかなれば異邦人はいう、かれらの神はいずこにありやと。願くはなんじ
の僕等がながされし血の報をわれらの目前になして異邦人にしらしめたま
え。

11 ねがわくは汝のみまえにとらわれびとの嘆息のとどかんことを。なんじの



大いなる能力により死にさだめられし者をまもりて存えしめたまえ。
12 主よわれらの隣人のなんじをそしりたる謗を七倍ましてその懐にむくいかえしたまえ。
13 然ばわれらなんじの民なんじの草苑のひつじは永遠になんじに感謝し、その頌辞を世々あらわさん。

●聖名の栄光のため

1 ああ神よ、もろもろの異邦人はなんじの嗣業の地をおかし、なんじの聖宮をけがし、エルサレムをこぼちて礫堆となし、
2 なんじの僕のしかばねをそらの鳥に与えて餌となし、なんじの聖徒の肉を地のけものにあたえ、
3 その血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり。されど之をほうむる人なし。
4 われらは隣人にそしられ、四周のひとびとに侮られ、嘲らるるものとなれり。

これは詩篇の74篇とその背景が大変似ていて、紀元前198年〜165年の例のアンチオカスという悪王の時代のものでしょう。そのときに彼がエルサレムの神殿をけがして、ギリシア化を図り、ゼウスの神の偶像を立てたり、残虐な迫害をした。そこで立ち上がったのがユダス・マカベヤスという信仰的英雄でした。しかし、学者によつては、これはバビロニア捕囚によつてエルサレム神殿がこわされた紀元前587年頃をバックに考えられると言うが、しかし、だいたいアンチオカス時代のことであろうと想像される。

5 エホバよ、斯て幾何時をへたもうや、汝とこしえに怒りたもうや。なんじのねたみは火のごとく燃ゆるか。

この「ねたみ」という言は変に響くのでして、英語でも「ジェラシー」と訳してある。原語は「カンナー」という語です。神はイスラエルの民を熱愛して止まないものであるが、イスラエルは不信を犯しているので、外敵がむしろ神の審判の道具になるというわけです。熱愛が、あるときには聖なる憤りとなり、怒りをもつて現われてくる。それを日本語の訳としては「ねたみ」というような語で表わしている。

6 願くはなんじを識らざることくにびと聖名をよばざるもろもろの国のうえに烈怒をそそぎたまえ。

7 かれらはヤコブを呑みその住処をあらしたればなり。

「こちらが貴神を信じないのは悪いことであり、「み怒り」をこうむるのかもしれないけれども、しかし、彼らが御名をけがし御名を信じない、それに対してどうか怒ってください」



ということをここで率直に祈っている。そういったところにイスラエル人の信仰の根強さがあるわけです。

8 われらにむかいて先祖とおつおやのよこしまなるわざを記念したもうなかれ。願くはなんじの憐憫あわれみをもて速すみかにわれらを迎えたまえ。われらは貶おとされて甚はなはだしく卑ひくくなりたればなり。

先代の不義を、みこころにとどめていつまでも怒らないでくださいと。信仰や道徳的責任は伝承するはずのものではない。それは預言者エゼキエルに示された真理でした（エゼキエル第18章参照）。

9 われらのすくいすくいの神よ、名みなの栄光のために我儕われらをたすけ、名のためにわれらを救い、われらの罪をのぞきたまえ。

今日の主題とするのはここです。

10 いかなければ異邦人はいう、かれらの神はいずこにありやと。願くはなんじの僕等しもべらがながされし血むくの報むくをわれらの目前まのあたりになして異邦人にしらしめたまえ。

11 ねがわくは汝ちからのみまえにとらわれびとの嘆息なげきのとどかんことを。なんじの大なる能力ちからにより死にさだめられし者をまもりて存ながらえしめたまえ。

血は生命の存するところである。不信は悪かつたにしろ、

「敵がイスラエルの血を流した罪も明らかに罪ですから報いてください」

と願う。11節の「死にさだめられし者」とは原語では「ベネー・テムーサー」といい、「血の子ら」ということ。この「血の子ら」を生かしてくださいという。この節の後半は、

「汝の偉大なる腕によつて血の子ら（血の迫害を受けているイスラエル）を救ってください」

という力強い表現です。

12 主よわれらの隣人のなんじをそしりたる謗そしりを七倍ななかさましてその懐ふところにむくいかえしたまえ。

「七倍」というこの言い方は、創世記4章の「カインとアベル」の話に、

「カインのための復讐が七倍ならば、レメクのための復讐は七十七倍」

とある。キリストは罪をゆるすところを

「七度を七十倍」

という言葉で表わされました。

●聖名を呼ぶ

今日の主題は9節にあるので直ちにそれを考えてみたいと思います。

9 われらのすくいすくいの神よ、名みなの栄光のために我儕われらをたすけ、名のためにわれ



らを救い、われらの罪おゆるしてください。

さて、「名」とは何でしょうか。モーセの十誡の第3誡に、

「⁷汝の神エホバの名を妄りに口にあぐべからず。エホバはおのれの名を妄りに口にあぐる者を罰せではおかざるべし」(出エジプト20・7)

とある。「妄りに」という語は「ラッシャウ」という言葉で、

「むなしく、いたずらに」

という意味と、もう一つは

「悪しく、偽って」

という意味合いの二通りある。両方で

「虚偽的に」

といつてもいい。消極的な気持と積極的な悪さと両方の意味をもっている。

何かものを「誓う」ときには、「神命に誓つて」ということを言う。あれと同じように、

「エホバは生く」

という言葉がある。これは誓いの言い方です。この「エホバは生く」というような言い方をするとき、虚しい心でなにか神を利用するような気持で偽りの証をたてる。そんなことをしてはいかん。それは神に対する冒瀆であるというのが十誡の本義であり内容です。

サムエル前書の14章45節に誓いの言葉がある。

「⁴⁵民サウルにいいけるは、イスラエルの中に此大なる救いをなせるヨナタン死ぬべけんや。決めてしからず。エホバは生く。ヨナタンの髪の毛ひとつじも地におつべからず。其はかれ神とともに今日はたらきたればなりと。かく民ヨナタンを救いて死なざらしむ」(サムエル前14・45)

「御名をあげる」とはこういうことです。

「ヤハウエーは生く」

というのはこの御名ですから。「エホバ」というのはもともと「ヤハウエー」という語なのですから。口語では、

「主は生く」

とあるようですが、「主は生く」では困る。同じくサムエル後書2章27節にも、

「²⁷ヨアブいいけるは、神は活く。若し汝が言い出さざりしならば、民はおのおの其兄弟を追わずして今晨のうちにさりゆきしならん」と(サムエル後2・

27)

「神(エロヒーム)は活く」という言葉がある。また、サムエル前書14・39、列王記上17・12、詩篇18・46にもある。「神が生きてある」とは実に仲裁する在り方です。

「神さまがある」

ということとは実は、



「神さまは救わんとしてある」

ことです。そのようなわけで、みだりに神の御名をあげるべからず。悪しき試みでやってはいけない。そのことをはつきり散文で言っているのは、レビ記19章12節です。

「¹² 汝等わが名を指して偽り誓うべからず。また汝の神の名を汚すべからず。

我はエホバなり」(レビ19・12)

これは大事な章ですよ。この、

「我はエホバなり」

という句を忘れてはいけない。自分を愛する自己愛が人間は強いが、それをひっくり返して「隣人を愛せよ」という。

「私がお前をそのようにして愛しているヤハウエーではないか。この愛がお前に入ったら、隣人を愛さずにはいられないよ。もし隣人を愛さないならば、お前は本当は生きていないのだ」

と。「生きる」とは「愛する」ことであり、「生きている」と、「愛している」ということは一つです。「エホバは生きている」とは、

「エホバは恵みたもう」

と同じことです。名は直ちに実ですから、これを偽ったら大変なことになります。また、「汝の神の名をけがしてはいかん。私は聖き名をもつところのヤハウエーであるから」

と。「ヤハウエー」の神であるから、名を呼べば必ず答える。答えるのに、呼び方が悪かったら逆に傷を受けるぞと。だから、聖名をけがした罪は必ず罰せられます。そして石打ちにされる。そのことはレビ記24章16節に出ている。

「¹⁶ エホバの名を瀆す者はかならず誅されん。全会衆かならず石をもて之を撃つべし。外国の人^{よそくに}にても自己^{おのれ}の国の人^{くに}にてもエホバの名を瀆す^{けが}においては誅

さるべし」(レビ24・16)

ですから、

「聖名を呼ぶ」

ということと、

「神に栄光を帰する」

ということとは、切っても切れない関係になってくる。

法華経で「観世音菩薩」の名をとなえると七難をのがれ、三毒を離れるというようなことが言われているようです。この称名ということが非常に大事なものは親鸞の歎異抄をみてもわかります。

一遍上人の語録の中に称名のことか次のようにあります。

「二代の聖教みな尽きて南無阿弥陀仏となりてはてぬ」



御名をとなえることによつて一切である、というようなことを言っている。また、「罪と功德との沙汰をさせずなまざかしき知慧をすて、身命を惜しまず偏に称名する他には余の沙汰あるべからず」

「かようにうち上げうち上げ称えれば仏もなく我もなく……よろず生きとし生けるもの、山川草木、吹く風立つ波の音までも念仏ならずと言つことはなし」

と。すべての現象があのような、今鳴いている虫の音も称名である。風の音も波の音も、蟬の声もすべて念仏であるという。

「すべてのものがうめき求めて、万物が神の子らの現われることを待つ」(口マ8・22)

とパウロが言っているような万事のうめき、叫び、讃美、祈り。これを一遍上人に言わせれば、

「これ念仏ならざるはなし」

ということになる。

パウロのロマ書10章13節に注目すべき言葉があります。

「すべて主の御名を呼び求めるものは救わるべし」

と。これはヨエル書2章32節の、

「³²凡てエホバの名を顫ぶ者は救わるべし。そはエホバの宣いし如くシオンの山とエルサレムとに救われし者あるべければなり。其遺れる者の中にエホバの召し給えるものあらん」

から引いた言葉です。この

「呼び求める者」

という語は「エピ・カレオー」という語で、ただ「カレオー」ではなく、「エピ・カレオー」というと

「呼び求めかつ深く念ずる」

ことです。仏教の方で「称念する」ということでしょう。呼んで心によく念ずることです。詩篇の1篇に、

「エホバの法をよろこび昼も夜もこれと思う」

とある。今度はこれは称法だな。日蓮宗においては、即ち法華経の法をとなえて思う。称法、称名、そして称念すること。これがこの「エピ・カレオー」の気持です。すべて呼び求める者は救われる。求めるのは深く求めなければいかん。神の御名を呼びつつ同時に念ずるということ。念ずるとは祈ることでしょう。念ずるというのは頭で思うところの思うではない。称念するということは呼ぶことが直ちに祈り念ずることです。ですから、求め念ずると実体の中へと念入する。そういう祈りが聖名を呼び求める「エピ・カレオー」ということなのです。

●聖名を崇める

今度は

「聖名の栄光のために」

というのですが、主の祈りにおいても、

「^{あが}聖名が崇められるように」

とあります。これは、

「聖名が聖としてあがめられるように」

ということです。聖書で

「神さまが聖である」

というのは、

「聖者が、きよき者が、けがれたる罪びとの中に入つて来ようとなさる恵みある聖」

なのです。天界にただ聖くおさまっているのではなくて、私たちきよからざるけがれたる者を救わんとして臨みたまう。ですから、

「聖としてあがめられる」

ということはどういうことかという、

「聖なる神が私たちを聖とせんとし、愛なる神が私たちを愛とせんとして、神のそ

の実質を入れようとする」

それが神さまの在り方ですから、「聖名を崇める」ということは、

「この聖なる神の恵みの聖をいただく」

ということになる。ですから、

「神の聖意が成るように」

という祈りと「聖名を称える」という祈りとは一つになる。

このことをもう一つ、はつきりとある例をもつていうなら、使徒行伝3章を見てください。有名なペテロが足なえを立たせたところです。ペテロにおいて有るところのものは何かというと、ナザレのイエス・キリストの聖名です。このペテロの中に有る聖名が、実になつて彼の中にある。ペテロは存在をもつて聖名の実を身に体している。聖名を称念している。これが聖名が有るということなのです。

「聖名が有る、聖名を称える」

ということは、

「私しない」

ということなのです。

「自分は神の、キリストの御霊の力があるぞ」

と言って、み力が自分の力であるかのようになったら、これは新興宗教的な角度になつてしまう。どこまでも、

「これはみ名であり、み名の實力です。一切はあなたです、私ではありません。足なえを立たしめたのは私ではありません。あなたの実名です。汝の聖意^{みこころ}です」

と、全てを神に帰さねばならない。神・キリストの栄光を現わします。それで私は常に、「あなたたち一人ひとりは天下一品である」

と言う。しかし、我々は何ものでもない。だから言うのですよ、「何ものかである」と思ったら大まちがいです。主イエス・キリストの他は何もない。ですから、

「私は主義も、主張も、何もありません」

といつも申し上げているのです。

「聖名の栄光のために」

と言いますが、何か二段構えではない。「聖名」といったならば、既に「聖名の栄光のために」ということです。聖名の栄光のための他に聖名の意味なんてありはしない。

「イエス・キリストの聖名を呼び求める者はみな救われる」

とパウロは言った。この聖名を呼ぶ者は救われる。キリストの聖名はすべてを救わんとする聖名です。「イエス」という言葉が事実そのなのです。

「イエホシュア」

というヘブライ語からきている。

「ヤハウエーは救いなり。神は救いなり」

というのがこの「イエス」という名なのです。神さまの救いは神さまの本願であって、我々が救われるための救いではない。神さまは救いなさるので、そのこと事態が栄光の現われることです。御利益でも何でもない。

「生命」という語はおもしろいですね。「命に生きる」という言葉でしょ。命とは命令、言いつけ、神さまの言いつけに生きることが生命することです。申し上げているように、

「聖意体现する」

ことが生命に生きることなのです。聖意を体现する、聖意に生きることが生命という。私たち人間が生きているとは、神の聖意に生きていること。神の法則にのっとって生きていることです。

だから、永遠に生きている。肉体がどうなるが、もう私たちの中には永遠の生命というものが、キリストの恩寵で来ている。

「病がいやさりたい」

と祈っていいですよ。しかし、自分の幸福、自分がどうのこうのというのではなく、それが直ちに神の栄光の現われるための祈りであり、全くキリスト中心でなければならぬ。

「神さま、あなたが私を造ってください。それがこんな欠陥だらけのしょうがない者であります。あなたが完全に仕上げたいとかかかってくださっている。どうか、そうしてください」



ということ。こういう祈りはぐんぐん力を得てきます。これは神の栄光の現れの本願にかなっていますから。ところが、

「自分が治ったら、何かうまいものを食べたい、治ったらこういうことをやりたい」

だとかいうような自我的な祈りで祈ったってダメですよ。あるいは祈りが非常に激しければ、祈りの世界はいろいろですから、御利益的にきかれることもありますよ。そんなことはきかれたってダメですよ、本当の意味の幸いにはならない。宗教の世界は、現象はいろんな類似なことは起きます。しかし、よってきたるところと向かって行くところの質が何であるかが一番重要な問題です。そこで私たちは、どこまでもキリストの福音的でなければいけない。

●イエス・キリストの聖名

バルトのことをとかくけなす人がありますが、しかし、バルトはさすがになんといっても素晴らしい神学者でして、例の『教会教義学』第1巻(下)の807頁のところで、

「聖書の内容、聖書の証言の対象は、罪びとを恵みをもつて取り扱いたもう神の名としてのイエス・キリストである。……聖書は多種多様のことを語っている。しかもこのすべての多様において唯一つのことを、正にこの一事を語っている。即ち、それはイエス・キリストの聖名である」

と喝破している。

日蓮は龍の口で斬られようとしたって、斬られやしなかった。彼が

「南無妙法蓮華経!」

と称すれば、もう彼は仏の姿になっているから、斬ろうとした下役は日蓮に臨在している仏の霊にうたれて、どうにもならない。親鸞にしたって、法然にしたってそうです。これは本当の称名ですから。いい加減に「南無妙法蓮華経」とか「南無阿弥陀仏」とか言っているのとは次元がちがう。ただ一回で結構です。一遍上人もこういう気持で言ったのだらうと思います。

私たちもその意味において、

「主イエス・キリスト!」

と本当に念ずれば、力がきます。自分がどんなに、いわゆる霊的素質がなくなっていたとしても、すよ。本当に聖名を称えて聖名を呼んでいけば、自分はいわゆる霊力などを感じなくても、その人を通して驚くべきことをキリストはなさってください。どうか皆さん、祈りは簡単です。

「主キリストよ! 主さまよ!」

でいい。キリストは、

「父よ!」



と呼ばれた。この「父よ」という一言の中に一切がかかっている。もう父が彼の中に現じている。

「父と我とは一つなり」

と。「父よ」と呼べば即ち、父と我とは一つであると。

「キリストよ」

と呼ばば、キリストと私は一つである。こういうようなことになりましたら、もう楽になる。

「祈れませんか」

なんて誰にも言わせませんよ。

「主イエス・キリスト!」

と、全身をもつて祈ることが最大な祈りなのですから、これ以上の祈りなんていうのはありはしない。あとはもう絶言絶慮し、言葉を絶し、思慮を絶してしまう世界です。そこへ入ってしまうと、また新しい祈りがそこから逆に出発してくる。神の聖意に従うような祈りになってくる。

「汝の聖名^{みな}です」

と言ったならばもう、

「救いたまえ、赦したまえ」

はその中に入ってしまう。「聖名」と言つてその中に平伏せば、もう救われてしまう。赦されてしまう。助けられてしまう。それはキリストの聖名は、あの恩恵の十字架と復活と聖霊の事実がこもっているからです。それを

「聖名の栄光のために」

と、何か形容詞のようにしていたならばダメですよ。これは形容詞ではない。これが主体ですから。

「私自身が救われる根拠も理由も私の側にはありません。ただ、神さまの聖名が立

つために、聖名の栄光が現われるために。それが一切です」

という。

「私の全生涯が聖名の尊崇のために用いつくされますように」

と。この祈りは聞かれます。この祈りが祈られるところには必ず恵みの力がのぞみます。キリストの十字架で既に自分がないのだから。私というものが放り出されて十字架の上にあるのですから、必ず主の復活の生命が生命となつて前進させられます。救贖即ち聖名の栄光です。アーメン、ハレルヤ!

